高等教育における手話通訳の活用に関する研究

－学術的内容の高度化に対応するための手話通訳の技術的ニーズに着目して－

○　日本社会事業大学　吉川　あゆみ（4859）
石野　麻衣子（筑波技術大学・8172）、松﨑　丈（宮城教育大学・8170）、白澤　麻弓（筑波技術大学・8169）、
中野　聡子（広島大学・8171）、岡田　孝和（日本社会事業大学・8177）、太田　晴康（静岡福祉大学・3215）
キーワード：障害学生支援・手話通訳・コーディネート

１．研 究 目 的

近年，高等教育機関に進学する聴覚障害者は増加しており，支援実施大学のうち 28.9%で手話通訳が用いられている現状がある（独立行政法人日本学生支援機構 2011：28）．しかし，高等教育機関における聴覚障害者のニーズや手話通訳技術の妥当性の検証は不十分である．ニーズが正確に把握されなければ，適切な手話通訳のコーディネート及びニーズを満たした通訳の実施は難しく，聴覚障害者の自立に支障をきたす．

この課題に対し、大学院修了者のニーズを踏まえて手話通訳評価項目の試案作成を試みた研究では、評価すべき項目が①通訳技術、②表現技術、③講義に応じた技術（翻訳）の3つに大別されたとの報告があり（吉川他 2010），学術的内容の高度専門化に伴いニーズが変化する傾向が見られることも指摘されている（石野他 2011）．

以上の知見を踏まえ，本研究では，石野他（2011）と同様の評価を用い，指摘されていた学部生・大学院生（修士課程）・大学院生（博士課程）の聴覚障害者が求める手話通訳ニーズを，評価の下位項目を分析することで，より詳細に把握することを目的とした．

２．研究の視点及び方法

１）モデル手話通訳映像及び手話通訳評価表

石野他(2011)と同様，手話の特徴と，原文から手話へ変換する際の細部の再現性の観点で異なる特徴を持った，4名の通訳者による計7つのモデル手話通訳（通訳 A1つ，通訳 B～D 各 2 つ）を用いた．通訳題材は同一起点談話の講義約 4 分間であった．

評価表も石野他(2011)と同一のものを用いた．設問 21 問の内訳は①全体像の把握(3 項目)②見やすさ(4 項目)③表現技術(3 項目)④情報量･忠実さ(3 項目)⑤論理や態度の伝達(4 項目)⑤語彙選択(2 項目)⑥総合評価(2 項目)であり，評価は 5 段階評価とした．また，評価前に通訳に対する考え方等を聞く事前アンケートを，終了後に自由記述の記入とヒヤリングを行った．

２）聴覚障害者による評価

属性群は，学部生 7 名，大学院生(修士課程)6 名，大学院生(博士課程)3 名とした．ただし，現役の学生が少数であるため，修了者も含めるものとした．

３）分析

石野他（2011）で学部生の評価が高い傾向が見られた通訳 C，及び，大学院生（博士課程）の評価が高い傾向が見られた通訳 D は，評価にニーズが反映されているものと予想された．そこで，通訳 C 及び通訳 D に対する評価を，下位項目に沿って詳細に記述すると共に，属性ごとのニーズの違いをより具体的に把握した．

３．倫理的配慮

分析に際しては，通訳者及び評価者の個人が特定されないよう配慮した．

４．研 究 結 果

学部生は全項目で通訳 C の評価平均が高く，わかりやすいリズムや表現技術で安心して

見られる通訳だったことがわかった．大学院生（博士課程）は全項目で通訳 D の評価平均が高く，大学院生（博士課程）にとって適切な表現技術を用いて論理構造を伝達しているとしていた．t 検定の結果,学部生は 21 項目中 14 項目で通訳 C の評価が有意に高かった．大学院生（修士課程），大学院生（博士課程）は有意差が見られなかったが，グラフで評価を全体的に見ると，大学院生（修士課程）は通訳 C と通訳 D の評価がほぼ重なり，大学院生（博士課程）は，学部生の評価と逆転して通訳 D の評価が高くなる傾向が見られた．

学部生は，特に「表現技術」の全ての下位項目で有意差があり，自由記述で「通訳 C は動きが大きくわかりやすい」「通訳 D は表情が乏しい」という意見が複数見られたことからも，通訳 C の「表現技術」が通訳 D に比較して明確で，はっきり読み取れたことが高評価につながったと考えられる．一方大学院生（博士課程）は，通訳 D の方が「見やすさ」「表現技術」について評価が高い傾向が見られた．また,「通訳 C は表情が豊かすぎる」「通訳 D はスムーズに理解ができる」という意見が複数見られ，通訳 D の訳出が自然な点が評価されたと考えられる．さらに，大学院生（博士課程）全員が，事前アンケートで，通訳者に望むこととして「事前資料を読んで通訳に臨むこと」を挙げ，講義の構造を理解した上での通訳を求めていた．同時に通訳 D を「前後のつながりが明確にわかる」と評価した者が複数いたことから，講義の論理構造の正確な理解と伝達が評価のポイントとなった可能性があると考えられる．

以上のことから，学部生，大学院生（博士課程）共に「表現技術」を求める点で共通するものの，学部生はより明確な手話を求め，対して大学院生（博士課程）は自然な手話を求めており，さらに後者は，論理の伝達にも高いニーズを持つ可能性が示された．従って通訳者は，各属性の学生が持つこれらのニーズを把握し通訳を行うことが求められると言える．加えて，大学院生（修士課程）の中には自由記述で「手話通訳を見て自身が手話を学習していたことに気付いた」と述べる者もおり，通訳者の手話をモデルとして，自身の手話の力の洗練，向上を図る学生がいることが推測された．よって通訳者は，聴覚障害者自身が発するニーズに応えることはもちろん，時には学生の成長を見越して，モデルとなる手話を提示することも重要なことが推察され，通訳者のコーディネートを行う者も，適切なタイミングで必要とされる技量を持つ通訳者を配置する必要があると考えられる．

今後は，モデル手話通訳の訳出を分析することで，聴覚障害者の評価の高い通訳者が用いている通訳技術の内容を示し，ニーズの変化の詳細を明らかにしたい．

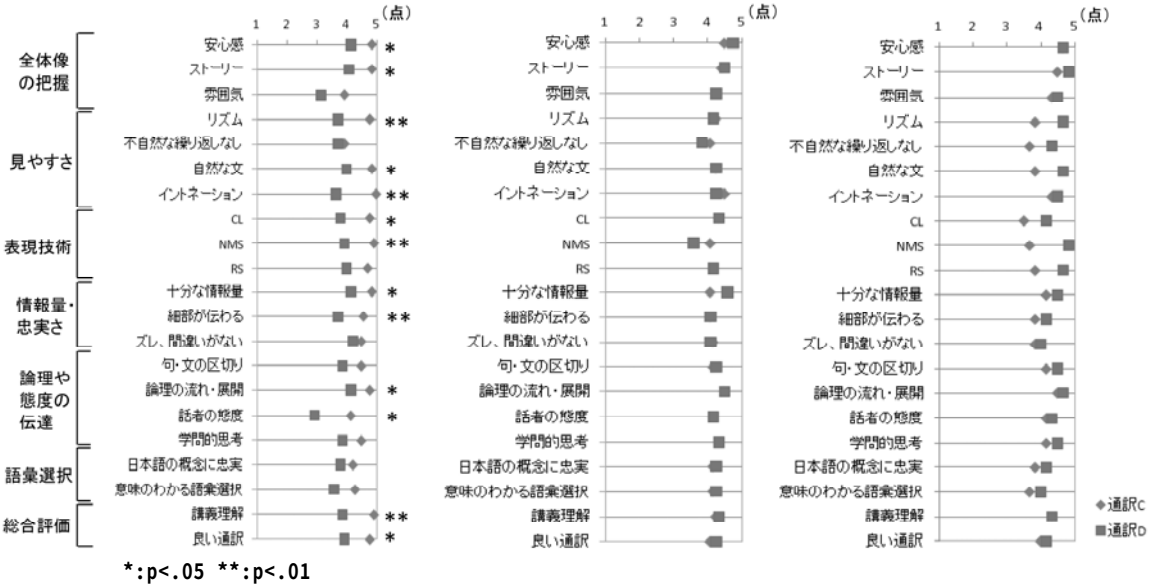

図 1 評価平均(学部生)　図 2 評価平均(大学院生[修士課程])　図 3 評価平均(大学院生[博士課程])

附記：本研究は日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）情報保障評価事業の一部である。